

氏 名	むろ や やす たか 室 屋 安 孝
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 166 号
学位授与の日付	平 成 13 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 哲 学 専 攻
学位論文題目	Nyāyasūtra II.2 における śabda の無常について

論文調査委員 (主 査) 教授 徳 永 宗 雄 教授 御 牧 克 己 教授 井 狩 彌 介

論 文 内 容 の 要 旨

1. 第1章：序論

論理学・認識論的な考察を主要テーマとするニヤーヤ (Nyāya) 学派の根本聖典は、『ニヤーヤ・スートラ』(Nyāyasūtra, ca. A. D. 3c, 以下 NS と略す) である。NS の第二篇第二章 (II. 2) は、主に śabda に関する議論を扱っている。このうち、本論文では、「音声」あるいは「字音」としての śabda が、発生論、因果論、存在論の側面から恒常 (nitya) であるのか、無常 (anitya) であるのかを論じる NS (CSS) II. 2.12—57 を取り上げ、それに関連する諸注釈の議論を検討する。

因果論では、世界事象がどのように発生し、どのように消滅するのか、またそのとき、生成・消滅の原因と結果は、どのような関係にあるのかが主題となる。因果論は、発生の原因にはどのようなものが存在するのかという議論を前提としなければならない。そこから発生した結果とはどのようなものか、原因とは何か、結果とは何かという存在論的な考察とも関わっている。また、古代インドの自然哲学の文脈では、そのような存在論的考察は、原因から結果の生じるプロセスをいかに認識するのかという認識論とも不可分である。ニヤーヤ学派や、それと姉妹学派的な関係にあるヴァイシェシカ (Vaiśeṣika) 学派の因果論の特徴は、範疇 (padārtha) 論に基づく世界事象の機械論的な解釈にあり、「普遍」(sāmānya, jāti) というカテゴリーによって、原因と結果は本質的に区別される。それに対して、サーンキヤ (Sāṃkhya) 学派は、究極的な物質原理である「根本原質」によって、原因と結果を本質的に同一であるとし、原因から結果の生成を「変化」(pariṇāma) あるいは「変容」(vikāra) と解釈する。またミーマーンサー (Mīmāṃsā) 学派は、śabda に関して、音声や言語の発生を、虚空に内在的に存在していたものが「顕現」(abhivṛyakti) するという立場を取る。サーンキヤ学派やミーマーンサー学派の因果論に立てば、śabda あるいは世界事象は、存在論的には発生以前に既に存在していることになる。これに対して、言語対象に實在論的価値を認めるニヤーヤ学派やヴァイシェシカ学派の因果論からは、結果は「発生」というプロセスによって初めて存在論的地位を与えられ、結果として認識されることとなる。

こうした古代インドの正統バラモン哲学の因果論は、存在論や認識論に関する議論と不可分な関係にある。これらの主題は、事物の、あるいは、より特殊化された事象として、śabda が、恒常であるか無常であるのかという議論として結実し、展開されることになる。したがって、本論文は NS II. 2.12—57 の主題である śabda の常・無常論を扱いつつも、その実際においては、ニヤーヤ学派とヴァイシェシカ学派の因果論、発生論、存在論、認識論を扱っている。その場合、本論第2章では、発生論及び認識論として、śabda の連続的空間伝播を表す samtāna という鍵概念と、kāryakāraṇobhayavirodhin の解釈問題を扱う。第3章では、存在論として、實在性 (sattā) という概念を中心に、結果性 (kāryatva) と無常性 (anityatva) との関係性を考察する。第4章では、因果論に関わる、原因と結果の存在論的関係の議論として、因中有果と因中無果論を取り上げる。また発生論として、サーンキヤ学派の提唱する、転変 (pariṇāma), 配置 (saṃniveśa), 顕現 (abhivṛyakti) に関する所説を考察しながら、それに対するニヤーヤ学派の批判も考察する。

以上のような研究領域の分類を、NS II. 2.12—57 の内容上の構造に対応させると次のようになる。NS II. 2.12 は、発生以前の音声に関して無の状態から発生するのか、それとも既に存在している状態から顕現するだけなのか、という発生論を主題としているので、因果論との関係から、第4章で考察する。NS II. 2.13—39 では、śabda の連続性が議論の主題であり、発生論、認識論を扱う第2章で考察する。NS II. 2.40—57 は、既に存在している音声としての śabda の変化を、代置(ādeśa)による交代と見なすか、変容(vikāra)ととらえるのかという議論であり、そこでは原因と結果の存在論的關係が主題となる。これについては第4章で考察する。

考察の対象となる文献資料は、NS とそれに対する注釈書群、すなわち、ヴァーツヤーヤナ(Vātsyāyana, ca. 450—500)による『ニヤーヤ・パーシュヤ』(Nyāyabhāṣya, 以下 NBh)、ウッディヨータカラ(Uddyotakara, ca. 550—610)による評釈『ニヤーヤヴァールツティカ』(Nyāyavārttika, 以下 NV)、ヴァーチャスパティ・ミシュラ(Vācaspati-miśra, ca. 900—980)による註解『ニヤーヤヴァールツティカ・タートパルヤ・ティーカー』である。中でも特に注目し、その思想の詳細な解明を行ったのはウッディヨータカラの思想である。というのも、ニヤーヤ学派の認識論や因果論は、ヴァイシェーシカ学派の範疇論を基礎にしており、その点では、ニヤーヤ学派の認識論や発生論、因果論を考察することは、ヴァイシェーシカ学派のそれを考察することに等しい。しかし、ヴァイシェーシカ学派の範疇論を確立し、ウッディヨータカラとはほぼ同時代に生きたプラシャスタパーダ(Praśastapāda, ca. 550—600)は、綱要書『パダールタ・ダルマ・サングラハ』(Padārthadharma-saṅgraha, 以下 PDhS)において、śabda の発生論や認識論に関しては、saṃtāna という術語は使用しつつも、理論の詳細を具体的に語っていない。また、因果論についても、因中無果と有果の論争に言及しながら、実際の論争がどのように展開されたのか、ほとんど語らない。ジャイナ教論書の『ドゥヴァーダシャーラ・ナヤチャクラ』(Dvādaśāranayacakra)では、「自己の原因及び実在性との結合関係(svakāraṇasattāsambandha)による因中無果の論争を展開する。しかしこの論争形式は、主な論争相手であったサーンキヤ学派の主要文献である『ユクティ・ディーピカー』(Yuktidīpikā, 以下 YD)には見られない。それに対して、ウッディヨータカラによる śabda の認識論や発生論には PDhS に先行すると推定される『十句義論』との一致点が多く、より詳細で、より体系化された叙述が見られる。また、NV における因中有果と無果をめぐる因果論は、YD に見られるヴァイシェーシカ思想に近い。少なくとも、śabda の発生論や認識論、それと関連する因果論に関しては、6世紀当時のヴァイシェーシカ思想の全体像を把握する上でも、ウッディヨータカラの思想の価値は極めて高い。本論文でウッディヨータカラの思想の解明を中心に置いたのは、単にニヤーヤ学派の注釈者というだけに留まらず、プラシャスタパーダの叙述にはない、ヴァイシェーシカ学派の思想に関する詳細な情報を提供する人物として、思想史上重要な位置を占めていたと判断したからである。その意味で、本論文は、プラシャスタパーダとウッディヨータカラのヴァイシェーシカ思想を比較する過程で、ニヤーヤ学派とヴァイシェーシカ学派の相関関係についても考察する。

2. 第2章：ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派における śabda の無常について

ニヤーヤ・ヴァイシェーシカの śabda 論を考察する際には、発生した音声の伝播の様態を示す「連続」(saṃtāna)の概念が重要な手がかりとなる。音声の「連続」性に関する所説は、NS II. 2.16 に初めて見られ、ヴァーツヤーヤナはこの概念を認識論の観点から説明している。彼の śabda 論は、prāpyakāritva に基づいている。すなわち、śabda は、聴覚器官と対象の相互接触により音声として認識される。音源から発生した音声は、空中を伝播して聴覚器官まで到達しなければならないから、空中を伝播する音声には伝播過程での連続性があると考えられる。ヴァーツヤーヤナは、プラシャスタパーダを含む彼以降のニヤーヤ・ヴァイシェーシカの学匠たちに「連続」の概念以外にも、いくつかの重要な概念を提供している。空間を伝播する音声の消滅の原因となる「対立」(virodha)や、音声が開聞こえ続けるための原因を説明する「潜勢力」(saṃskara)などである。

ウッディヨータカラは、śabda に関してヴァーツヤーヤナ以上に詳細な考察を行った。彼の叙述の特徴は śabda の範疇論的説明にある。ヴァーツヤーヤナは、潜勢力を音声の発生や連続の根拠として自然学的に利用するが、ウッディヨータカラは、音声や潜勢力を属性とみなした上で、範疇論の体系の中に位置付けようとした。プラシャスタパーダは、音声理論に言及するときに、潜勢力に全く言及していないことを考えると、ウッディヨータカラの学説は、ヴァイシェーシカ思想史の考察に、重要な情報を提供していると考えられる。

ウッディヨータカラの学説に基づけば、音声連続には主に二つのタイプが区別される。その一つは、『ヴァイシェシカ・スートラ』(Vaiśeṣikasūtra) (GOS) II.2.36 にその原型が述べられるもので、最初の音、中間の音、最後の音の三つの音があると考え、後の二者を「音声から発生する音声」(śabdaja-śabda) と見なす。この考えは、プラシャスタパーダ以降、音声連続に関するヴァイシェシカ学派の主要理論となる。第二のものは、音源となる鈴等の運動(karman)の持続の原因である、潜勢力の連続と関連している。これにより、音声の消滅過程(mandataratamāddinyāya)の説明が可能となり、自然学的理論の整備がなされるだけでなく、音声の連続を範疇論的に解釈する傾向が強化される。なお、ウッディヨータカラによって導入されたこの二つの持続形式は、それぞれ「波状の道理」(vicīṭaraṅganyāya)、「カダンバ樹の実の道理」(kadambagolakanyāya)の名で、新ニヤーヤ学派(Navyanyāya)まで継承されていることは、B. Seal らによって既に指摘されている。

ヴァイシェシカの『十句義論』や、仏教経量部の論書『成實論』では、潜勢力を用いた所説は、ニヤーヤ学派ではなくヴァイシェシカ学派の説として引用されているので、プラシャスタパーダより前、saṃskāraによる音声伝播説がヴァイシェシカ学派でも唱えられていたことが推定される。

一方、プラシャスタパーダは、śabdaの伝播に関する詳細な議論を行わず、「結果、原因、その両方との対立」(kāryakāraṇobhayavirodhin)という関連する表現を用いている。学界の一般的な定説は、「原因との対立」は、最後の音声直前の音声によって消滅することを述べたものとする。しかし、ウッディヨータカラまでの学説史の考察によって、この表現が、最後の音声の消滅過程を述べたものではない可能性の高いことが考えられる。プラシャスタパーダはまた、śabdaを無常(anitya)という一般的な表現によっては述べず、「刹那的」(kṣanika)であると述べている。これは『十句義論』に見られるヴァイシェシカ説とは異なっており、『成實論』における仏教側の主張にむしろ近く、仏教学派からの影響も推定される特異な理論と言える。ヴァイシェシカ学派では他に認識(buddhi)も刹那的であると述べられるが、śabda理論との共通性は、初期ニヤーヤ学派からの影響も推定される。

プラシャスタパーダより後の注釈者は一般に、śabdaの連続に関して、伝播説を採っているが、ヴァーチャスパティ・ミシュラはNVTIにおいて、音声伝播を空間の部分(bhāga, pradeśa)の連続として説明する。その見解はウッディヨータカラにも見られるが、ヴァーチャスパティ・ミシュラになると、音声の連続を、音声そのものによって説明するのではなく、その基体となる虚空によって説明する傾向がより明確になる。それによって、śabdaの属性としての存在論的価値は、希薄になっている。

第二部には、NS II. 12—57 に対する諸注釈の関連箇所和訳を付した。NVの関連箇所和訳に際しては、css版と最近出版されたA. Thakur氏の校訂本との比較を行い、そのどちらの校訂本も不完全なものであることを指摘した。

3. 第3章：ニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派における恒常と無常

プラシャスタパーダは、無常に関して、結果性(kāryatva)と原因をもつもの(kāraṇavat)という用語と並置し、概念の類似性を示唆するが、それ以上の詳細な説明は行わない。注釈者であるヴォーマシヴァやシュリーダラは、プラシャスタパーダの述べる無常性とは、消滅(pradhvaṃsa)であるとして、6世紀までのśabdaの無常性をめぐる論争の背景を何ら前提としない、単純化された定義をする。それに対して、ウッディヨータカラは、śabdaの無常性に関する議論において、結果性や無常性に関して、存在論的な考察を行う。彼によれば、無常性とは、「[発生と消滅という]両極によって限定された事物の実在性」(ubhayāntaparicchinnavastusattā)である。「実在性」というヴァイシェシカ哲学の存在論上の鍵概念によるこの定義は、無常性だけでなく、対立概念である恒常性をも説明することができ、ヴァイシェシカの範疇論に基づく明確な説明といえる。ウッディヨータカラの説明は、後代のヴァイシェシカ学者であるヴォーマシヴァらによって批判の対象とされるが、6世紀当時のヴァイシェシカ思想を伝えている可能性が高く、プラシャスタパーダが事物の「発生」を「自己の原因及び実在性との結合」(svakāraṇasattāsambandha)であるとして、実在性によって解釈しようとした傾向とも一致する。後代の注釈者達よりもウッディヨータカラの情報の方がより古い思想を伝えている可能性が高い。

4. 第4章：サーンキヤ学派とニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派における発生論

因中有果論は、根本原質(prakṛti)が恒常であり、経験世界を構成する物質存在はその根本原質に内在するという考えである。その論証としては、NVにおいては、原因に潜勢的に存在するものが顕在化するという顕現(abhivṛyakti)説が用

いられる。一方 YD においては、根本原質の恒常性を説明するものとして「転変」(pariṇāma) 説が用いられた。転変論と顕現論が密接に関連していたことは、今西順吉氏の研究によって明らかにされているが、YD と NV のサーンキヤ学派の因果論の関連性を考察した詳細な研究はない。そこで、サーンキヤ学派の恒常論とニヤーヤ・ヴァイシェーシカの無常論との論争の考察に際して、顕現説だけではなく、転変説も考慮することが必要となる。

YD には、転変について二つの異なった見解が見られる。その一つは、物質存在の質料因である根本原質の三つの構成要素 (guṇa) のはたらきを重視する考え方である。それによると、経験世界の構成物は、三つの構成要素の特殊な配置 (saṃnīveśaviśeṣa) によって発生する。このサーンキヤ学派の発生論によれば、三つのグナは恒常な根本原質の構成要素であるので、グナの配置が変化しても、根本原質そのものは何も変化しない。この説は、YD だけでなく、『ニヤーヤ・ブーシャナ』(Nyāyabhūṣaṇa) 等の文献でも因中有果論の根拠として引用されている。ディグナーガ (Dignāga, ca. 480—540) の『プラマーナ・サムツチャヤ』(Pramāṇasamuccaya) も、三つの構成要素の形態 (saṃsthāna) によって説明するサーンキヤ説に言及している。この転変説はサーンキヤ学派の根本聖典である『サーンキヤ・カーリカー』(Sāṃkhyakārikā) には見られないが、サーンキヤ学派に固有の説であったことが明らかである。

第二番目の転変説は、本体 (dharmin) と性質 (dharma) を区別して諸原理の展開を説明するものである。性質は、発生と消滅を繰り返すが、本体そのものは恒常不変とする考え方である。変化するものは異なるが、その背後に恒常な実体を想定する点で、この転変説も第一の転変説と変わらない。第二の転変説は、仏教有部の代表的な論書『俱舍論』にサーンキヤの学説として引用される。また NBh には、金や牛乳の変化を叙述する際に類似した思考が見られ、「変異」(vikāra) と呼ばれているが、表現形式や用語法などの分析から、ニヤーヤ学派などの自然哲学派で成立した理論が、サーンキヤ学派に影響を及ぼした可能性の高いことが推定される。

ウッディヨータカラが紹介したサーンキヤ学派の顕現説は、彼以降、ニヤーヤ学派の注釈書では、因中有果論証の際には一貫して言及される。また、中観派のチャンドラキールティ (Candrakīrti, ca. 600—650) の『プラサンナパダー』(Prasannapadā) にも、顕現説が因中有果論者の論拠として言及されている。このことから、当時、サーンキヤ学派は転変説よりも顕現説を用いて因中有果論を主張していた可能性が高い。

因中有果論証における転変説から顕現説への移行の背後には、NS II. 2.40—57 における śabda の変化をめぐる議論を背景としていたことが推定される。

第二部では、NBh, NV と YD の該当箇所の和訳を付した。

論文審査の結果の要旨

正統派インド哲学諸学派が唱える因果論は基本的に、結果は現れる前に原因の中に潜在的に存在するという因中有果論と、原因と結果は異なるものであり、結果は原因の中に含まれていないと考える因中無果論の二つに大別される。前者は、第一原因からの諸存在の開展を説く古典サーンキヤ学派、後者は範疇論と原子論に基づいて自然界の構成要素の成立を考察するヴァイシェーシカ学派によって代表され、両派を中心に各派の間で活発な因果論争が繰り広げられたが、現存する両派の文献のみに基づいて因果論争の全容を明らかにすることは極めて難しい。そこで、論者はヴァイシェーシカ学派と姉妹関係にあり、同派と同じく因中無果論の立場を採るニヤーヤ学派の根本経典『正理経』(Nyāyasūtra) とそれに連なる諸注釈文献に展開されるシャブダ (śabda) 論、つまり音論・言語論に注目して、因果論に関わる諸問題の研究にこれまで従事してきた。本論文は、論者がその研究の過程で発表した三篇の論考をもとに、それらの内容を改訂し、かつ、集大成したものである。

ニヤーヤ学派のシャブダ論については既に多くの研究が為されているが、言語の本質、語の指示対象、語と語の指示対象との関係といった、言語に関するインド哲学の伝統的諸問題を論じたものが殆んどであり、ニヤーヤ学派のシャブダ論を因果論の観点から本格的に扱った研究は少ない。序論で論者が、「シャブダに関する議論を考察することによって、因中有果・因中無果をめぐる因果論を新たな視点で考察することを目的とする」と述べているように、本論文は、ニヤーヤ学派のシャブダ論を、常・無常論、因中有果・無果をめぐる因果論、世界の発生と消滅に関する議論、顕現論などの視点から検討することを目指しており、この点に、これまでの因果論研究には見られない本論文の大きな特色が認められる。

本論文のもう一つの特色として、ニヤーヤ学派のウッディヨータカラ著『正理評釈』(Nyāyavārttika)を手がかりにして、ヴァイシェーシカ思想を再構成しようとしたことが挙げられる。本論文で論者は、ニヤーヤ学派の文献から特に『正理評釈』を取り上げて議論を展開しているが、それはこの文献が、ヴァイシェーシカ学派の範疇論を体系化したブラシャスタパーダの『句義法綱要』(Padārthadharmaśāstra)には見られないヴァイシェーシカ本来の思想伝統を保存している可能性があるからである。しかも、ブラシャスタパーダはウッディヨータカラとほぼ同じ時代(6世紀後半)に属することから、後者の思想と対比することによってブラシャスタパーダの思想体系の特色が鮮明になることが期待される。その意味で、本論文は、ブラシャスタパーダの『句義法綱要』研究という側面も持っている。

第1章「序論」と第5章「今後の研究課題」を除くと、本論第一部は、主要資料である『正理評釈』の論旨に応じて、第2章[Nyāya-Vaiśeṣikaにおけるśabdaの無常について]、第3章[Nyāya-Vaiśeṣikaにおける恒常と無常]、第4章[SāṃkhyaとNyāya-Vaiśeṣikaにおける発生論]の3つの章に分けられている。

このうち、第2章では、音声の伝播に関する議論を紹介した上で、ヴァイシェーシカの『十句義論』や仏教経量部の『成實論』に基づいて、ブラシャスタパーダより以前のヴァイシェーシカ学派が、運動継続の原因とされる潜勢力(samskāra)を音声伝播の根拠として認めていた可能性があることを指摘している。ヴァイシェーシカ哲学を体系化したブラシャスタパーダは、音声伝播の根拠としての潜勢力には言及しない。この点に関し、論者は、潜勢力に付随する運動の観念がヴァイシェーシカ学派の範疇論に整合しないため、ブラシャスタパーダが潜勢力をシャブダ論から排除したと推測する。さらに、ブラシャスタパーダが音声の一時的存在を「無常」(anitya)ではなく、仏教から借りた「刹那滅」(kṣanika)で表現するのは、潜勢力なしに音声の消滅を説明する難を回避するためであったと説明する。

第3章では、因果論にとって重要な概念である「恒常性」と「無常性」の定義が取り上げられる。6世紀後半にヴァイシェーシカ学派がこれらの概念をどのように理解していたかは極めて興味ある問題であるが、ブラシャスタパーダ自身は『句義法綱要』で、「恒常性」についても「無常性」についても定義を与えていない。そこで、論者は、思想的にヴァイシェーシカ学派に近接するウッディヨータカラが、「無常性」を「(発生と消滅の)両極によって限定された事物の存在性(sattā)」と定義していることから、当時、ヴァイシェーシカ学派でも「無常性」が同じ定義で理解されていた可能性があるとして述べている。また、論者は、究極・単一の普遍である「存在性」を用いて「恒常性」と「無常性」を同時に定義しようとしたウッディヨータカラの思想的独創性にも注目している。

第4章では、論点が、因中有果論を採るサーンキヤ学派の因果論に移る。因中有果論では、原因と結果の同一性をどのように説明するかが大きな問題となる。この点に関して、一方には、原因の構成要素の「配置」(samniveśa)ないしは原因の性質(dharma)の変化により原因から結果が生じるが、両者は本質においては同一と考える「転変説」(pariṇāmanavāda)、他方には、結果は原因に潜在する要素が表に現れたものに過ぎないとする「顕現説」(abhivyaktivāda)がある。論者は、サーンキヤ学派の代表的注釈文献『ユクティ・ディーピカー』(Yuktidīpikā)を、仏教論書や『正理評釈』中に引用されるサーンキヤの因果論と対比することによって、因中有果論がサーンキヤ内部で「転変説」から「顕現説」に移行していったこと、また、6世紀後半には「顕現説」がサーンキヤ学派内で主流の考えであったことを論証している。

論文の第二部は、『正理経疏』(Nyāyabhāṣya)、『正理評釈』、『ユクティ・ディーピカー』中の本論に関係する個所の和訳から成っている。難解なテキストを全体として正確に訳しているが、子細に見ると改善の余地がないわけではない。

以上の概説から明らかなように、本論文が解明を試みた因果論に関わる諸問題は、音声伝播の問題、「無常性」の定義、因中有果論の変容など、多岐にわたっており、結果として論文全体の一貫した論理構成が見辛く、一読して論旨を理解することはむづかしい。個々の議論は綿密に考察され論証も信頼できるが、細部の綿密さによって支えられるべき中心点が分かりにくい。この種の難点は提示の仕方を工夫し、表現を明晰にすれば回避しえたとはいえない。なぜなら、本論文を繰り返し読むことによって、「問題はよく考え抜かれている」という印象を評者は持つことができるからである。読者の理解を得るためには、少なくとも序論において論文全体の論旨を明確に述べるべきであったと思われる。また、論者の見解には慧眼と思わせるものが少なくないが、今後更なる検討を要するものも含まれている。しかし、これらの問題があるにせよ、『正理評釈』のシャブダ論を手がかりに、因果論が内包する諸問題と本格的に取り組んだ研究として、本論文の独創性と意欲は高く評価されるべきである。また、因果論争に関するいくつかの問題点を解明ないしは明確化し、かつ、ヴァイシェーシカ学

派の伝統において範疇論の枠組みを守ろうとしたブラシャスタバーダの『句義法綱要』の特質を浮彫りにしたことは、本論文の成果として特筆に値する。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成12年10月27日、調査委員三名が本論文とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。